

「S字甕の普及に関する一考察

- 墓域での器種組成を中心に - 」

村手 裕一

古墳時代初頭、濃尾平野において、ある甕が急速に普及する。その甕こそ今回取り上げるS字甕である。ユニークなデザイン、在地系の甕とは異なる製作方法、特殊な胎土、急速に普及する性格、どれをとっても、謎の多い甕である。無論、多くの研究者が今までその謎に取り組んできた。そして、いくつもの仮説が提示された。その中でも、有力な説とされるのが、政治的な意図のもと製作され、普及したというものである。しかし、この説もやや漠然としており、S字甕の具体的な普及の様相は未だ不透明なところが多い。

S字甕は濃尾平野以外にも広域に渡って流通・普及した。そのため、今までのS字甕研究は出土分布を中心とする研究に偏ってしまい、濃尾平野内においては広域編年のためにS字甕を指標とし、細かい編年を組む研究が主だった。いわば、S字甕は、東海系文化圏の代表土器としてごく当たり前に位置付けられているものの、濃尾平野内におけるその普及の研究はあまり多角的に研究されていなかったといえよう。そこで、筆者は先学が行ってきた研究とは異なるポイントからS字甕をみたら、また違った解釈が提示できるのではないかと考えた。

方法としては、墓域での器種組成に注目して分析を進めた。まず、廻間遺跡の住居域と墓域とで、時期ごとに器種組成比率の差異を出して、墓域での器種組成の特徴を示し、その背景を考察した。それをふまえた上で、他の遺跡との器種組成を比較し、廻間遺跡の位置付けを行った。なぜ、廻間遺跡なのかといえば、廻間遺跡は他の遺跡に比べ、S字甕の出土量が多く、出現期のS字甕比率も高い。廻間遺跡とS字甕には何らかの関係があったと推定できるためである。

その結果、S字甕には出現当初は特殊な性格は備えておらず、普及していく過程の中でその特殊性が身についていったという仮説を提示できた。また、S字甕が普及するにあたり、中心となる集落とその周辺集落の構図が存在し、それが墓域におけるS字甕の比率に反映されていると指摘できた。S字甕普及の中心となる集落はこの時期の広域土器交流において、他地域土器の受容が早いことから、おそらく、当地域の権力者だと推定できる。とすれば、S字甕製作に関わっていた集団が力を持つようになっていったという構図がみえてくる。S字甕はこの集団が力をのばしていく上で、いわば象徴的、政治的に用いられたという仮説も成り立とう。